

若手研究者海外派遣プログラム 派遣終了報告書

1 派遣者	
所属機関	国立歴史民俗博物館
氏名	荒木 和憲

2 派遣計画 概要	
派遣国	大韓民国
派遣期間	平成 29 年 9 月 11 日 ～ 平成 29 年 11 月 24 日
派遣先機関名	江原大学校人文大学史学科
(英語)	History Department, College of Human Studies, Kangwon National University
受入教員名	孫承喆
(英語)	Son Seung Cheul
研究課題名	17 世紀前半の日本と朝鮮との交流史に関する歴史文化資料の調査研究
(英語)	A Study on the Historic and Cultural Resources related to the History of Interchange between Japan and Korea in the early 17 th century

3 派遣による研究実績

(1) 調査研究実績 (研究計画に沿い、実施したことを記載してください。)

本研究は、17世紀前半の日本と朝鮮との交流史に関して、文献史料を中心とする歴史文化資料の調査研究を行うものである。国史編纂委員会に保管される「対馬宗家文書」(対馬藩の宗家に伝来した文書群)の調査と収集をメインに行った。

国史編纂委員会の史料館を訪問し、「対馬宗家文書」に含まれる近世前期の日朝往復外交文書集を重点的に調査した。収集する史料の年代は、1598年から1635年までとした。以前はマイクロフィルムの紙焼き枚数に厳しい制限があったが、現在はマイクロリーダーの画面をデジタルカメラで撮影することが許可されているため、調査対象史料(79件)を全カット(4,861枚)撮影することができた。当初の想定以上の分量となったため、歴史文化資料全般に手を広げるのではなく、当該史料の整理・目録作成、および翻刻等の基礎作業に特化して進めることにした。

今回収集した史料の中心をなすのは、①「書契」原本、②『善隣通書』、③『歳条来書』、④『不時来書』である。①の「書契」とは日朝間を往復した外交文書のことである。朝鮮王朝の外交部門である礼曹から対馬宗氏にあてた外交文書の原本は、1635年までで347通を数えるが、対馬から毎年定例で派遣される歳遣船(貿易船)が持ち帰ったものがほとんどで、内容的には儀礼的なものが多い。②は対馬で編纂された日朝往復書契集であり、17世紀前半の内容を含むものは26冊、収録点数は352通(重複を除く)である。現存する書契からは知りえない重要な内容を含むものが多く、「慶長の役」の終了(1598年)から日朝国交回復(1607年)、そして「柳川一件」(1635年)に至るまでの外交交渉の過程を詳細に伝えるものである。③は歳遣船が持ち帰った書契の写しであり、全3冊で収録点数は378点である。儀礼的な内容のものが大部分を占めるが、①を補完するものである。④は非定例で朝鮮から対馬に送られた書契の写しであり、全3冊で収録点数は78点である。重要な外交交渉に関わる内容のものが多く、②を補完するものである。

これら①～④の史料やその他の史料を網羅的に収集・整理し、日朝往復書契の目録データを作成した。今後の精査を要するが、重複を除けば、1598～1635年の書契は約1,000通にのぼることが判明した。その上で、17世紀前半の日朝外交の展開過程を綿密に分析するには、②と④の詳細な分析が必要であるとの課題が明確になった。

滞在中は中近世日朝関係史に関連する図書・論文の収集(図書38冊、論文325点)、および対馬藩初代藩主宗義智(1568-1615)に関連する朝鮮史料の収集・整理を併行して進めた。あわせて東北亜歴史財団で研究者対象のセミナー、全北大学校で大学院生対象の特別講義、財団法人韓日文化交流基金で市民・学生対象の講演を韓国語で行った。いずれも中世日朝関係史研究(14-16世紀)をどのようにすれば近世日朝関係史研究(17-19世紀)へと架橋させることができるのか、現時点での見通しを述べたもので、本研究に深く関わる内容である。

なお、今回の派遣にあたり、財団法人韓日文化交流基金から研究費(700万ウォン)の支給を受けた。

(2) 基幹研究プロジェクトにおいてこの派遣が果たした役割

現在、基幹研究プロジェクト「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」に共同研究員として参加し、「中近世日本の国際交流史に関する歴史文化資料の目録化」を分担課題としている。

本研究においては、基幹研究プロジェクトの趣旨に即し、近世初期（17世紀前半）の日朝交流史に焦点を絞るかたちで、韓国・国史編纂委員会保管の「対馬宗家文書」に含まれる日朝往復外交文書を網羅的に収集し、基本情報の目録データ化（約1,000点）を完了させた。これによって日韓両国に散在的に現存する外交文書、および散逸して現存しない外交文書を「目録」というかたちで集成することができた。今後、国史編纂委員会との協議が必要になるが、当該の研究資源を公開することができれば、日本国内にとどまらず、日韓両国の研究者による国際的な共同利用へと発展する可能性がある。

(3) 所属機関における学術分野に貢献する事項

①基幹研究「中世文書の様式と機能および国際比較と活用に関する研究」

現在、当該研究に共同研究員として従事し、外交文書論を担当している。外交文書論は古代から近世にかけての連続性を踏まえる必要があるため、今回収集した資料の分析・検討によって、当該研究に貢献することができる。その成果の一部は、企画展示「日本の中世文書」（平成30年9月～12月）にも反映させる。

②科研基盤研究（B）「中世日本の東アジア交流史に関する史料の集成的研究と研究資源化」

現在、研究代表者として当該研究に従事し、中世日本の東アジア交流史に関する史料の網羅的な収集を進めている。平成29年度内に基幹研究プロジェクト（総合資料学）との連携によって「中世日本東アジア交流史関係史料データベース」（β版）の公開・運用を開始する予定であり、将来的には今回の研究成果と連動させることも可能である。

(4) 研究成果（著書、論文及び報告書名・講演題目）

①特別講義「中世の対馬」（全北大学校人文大学史学科、韓国語）

②講演「貿易品をとおしてみる15・16世紀の韓日関係」（東北亜歴史財団、韓国語）

③講演「朝鮮前期の韓日関係—本格的な経済交流の始まり—」（韓日文化交流基金、韓国語）

(5) 見込まれる研究成果（著書、論文及び報告書名・講演題目）

①単著『宗義智』（人物叢書、吉川弘文館、出版の内諾済）

②史料紹介「近世前期日朝往復外交文書集成（稿）」

①に関しては、今回収集した史料の分析・検討の成果を反映させ、2020年度までの刊行をめざす。②に関しては、国史編纂委員会の許可が得られれば公表する。その場合、収集史料が約1,000点にのぼるため、複数回にわけて、『国立歴史民俗博物館研究報告』に投稿する予定である。近世前期の日朝往復外交文書（1598-1635）を網羅した史料集を公開することで、「文禄・慶長の役」（壬辰・丁酉倭乱）から日朝国交回復、そして朝鮮通信使の復活に至るまでの日朝外交の展開過程を日韓両国の研究者が共同で行うことも可能となる。

(注意事項)

- ・本報告書は、帰国後1ヵ月以内に提出して下さい。
- ・この報告書を、本機構により刊行、Web掲載、広報冊子等として公表することがあります。この場合、内容に影響しない範囲で修正を行うことがあります。